

選手層と体格差を痛感



日本選手団監督

村
庄

五

くし、日本代表としてのプライドを持ち、自覚と責任の上にたって試合に勝たねばならぬ重大な使命をいただき選手権に又親善試合にのぞんだ。

「勝てば官軍負ければ賊軍」という諺があるようにスポーツは勝たねばならない。勝つために大会に参加し又練習をする……。勝つためには精神的、肉体的、技術的问题があり、特に国際試合では多くの経験が大いにものを言つた。

後掲の座談会におけるコーチ陣の発言と重複する部分もあるが、以下、今回の遠征の総体的な回顧を記しておきたいと思う。

当然なことではあつたが歐州選手の試合に対する勝利への執念と根性はおそろしいほどのものであり、この遠征で学んだ一番大きな収穫とも言える。その意味でチヨコ、ルーマニア、ソ連は今後上位を占めることは間違いないだろう。

練習のたまものであり、さらに身体が柔軟で強いバネと手首の強靭さは抜群であった。日本と比較して瞬発力、敏捷性の差が大きく、日本は後半中頃を過ぎると急に体力が衰え攻防が難になり、そこをつっこまれた。ゲームスタミナに欠けているからだ。

各国を見て非常に選手層が厚いことも強力体勢の一つにあげられる。基礎について彼等はしっかりとしている上にスピードがあり忠実でミスがない。卓越した個人技と機械のように正確なパワークを織りませたコンビネーションプレーは立派であり大いに勉強になつた。日本も勝つためには基礎体力、基礎技術そしてあらゆる分野の基本的問題をよくマスターするよう練習・練習・練習あるのみだ。ソフトワークも実に正確でスピード

中身からののが多く、サインは選手でも相手のディフェンスの脇や膝付近からも強烈なショートをよく決めた。又各国とも左利きのショーターがよくポイントを擧げた。日本のタイミングを狂わした。ジャンプショート、又GKの手前でバウンドして膝の高さに上つてくるタイミングのあわないショートがよく入った。

走り動き廻ることだ。

防衛について日本の軽率なプレーが失点を多くした。これは彼等のスピードある動きにほんろうされ、防衛が後手に廻り構えが悪く相手に対するツメが遅れ、個人のマークにもづれができたためと言える。ゾーンディフェンスにもセットディフェンスを組み、動きの早い相手を見失うことなくマンツーマンができなければならぬい。彼等はボールを持たない相手に対し執拗にボディーチェックをやった。この為日本は弱すぎて攻撃力を破壊することができなかつた。チャコ、ルーマニア、ソ連、西ドイツ等が対戦するとき、試合始めからマンツーマンディフェンスを採用した。その気力、体力、ファットワークの良さはしばしば驚かされた。敵にボールがある時、次のプレーへの適確な読みが早

審判技術は特にゲームの進行を本質としルールに忠実であり態度は威厳があった。体格、ボールを握る相違があるので身体接触に対する判定の規準は当然違っていた。しかし荒さ、フェアでないプレーに対しては厳しかった。総合して日本の審判は優秀であると思う。

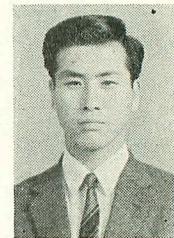
今後は、この遠征で学び得た秀れたハンドボール技術と根性を日本ハンドボール界のために大いに役立たせたい。又ハンドボールを通じ、微力ながら国際親善に貢献できたことをつけ加えておきます。最後に日本のハンドボールマント及び関係者より絶大なる御支援、御声援を頂いたことに対し深く感謝します。

ドがあつた。ショートも肩・手首の強さとボールを握るのでスピードが全然違う。日本のようによくあたるが彼等の人はスピードで確実に入る。シュー

めるのはむろんだが、個人技と共にコンビネーションプレーに変化をもたらす必要がある。各国の攻撃は点の取れる攻撃で、走るべき時には必ず走り得点した。そして粘り強くバスケット式攻撃法、ブロック、ポストプレーにスピードがあり、ボストに展開するバスのテクニックの変化とスピードは実にすばしかった。これも今後日本は大いに学ぶべき点である。現

本は特に攻撃後の防御への帰陣が遅くそこをつかれ得点された。ゴーリキーパーの技術の差は他の技術の差より特に大きく、今後歐州と対等に戦うには、GKの技術向上をはかることが先決問題である。彼等の反射神経の鋭さはある。それといった。これもスピードのあるショートを受けている結果である。GKの優劣が試合に非常に

威力ある片手の球操作



北井 晴次

前に大きな壁がで
きたかのようにさ
え思ふ。

つまり、プロッ
クにしても、オフ
エンス全体が動き
ながら、サッと入
るので成功しやす
いように見えた。

ほとんどフリー
スローライン平行
mlinnaボールをらくらくと握つて
プレーする。

とも思えるような大きなローリング攻撃、一人がボールをパスするまでにはほとんど45度の位置から逆の同位置まで、ドリブル、ショートフェイント、ジャンプなど許される歩数を確実かつ有効に使つて大きく動くのが特色である。

彼らのディフェンスは一般にはとんどが6人の一線防禦をとり、しかも非常にマン・ツウマン的な要素が強かつたということである。西ドッグを例にとれば、フリースローラインの前方からブレスを通す。攻撃の時、ブロックを利用してのロングショートやパスエンスを非常によくひきつけることが可能となる。そして各種のフォーメーション・プレーが生じてくるわけである。

個々のプレーについていえば、ロングショートのスピードと正確さである。

しかし、今回の遠征において、世界選手権3試合をふくめ日本の長身者のロングショートが効果的で敏捷であったということであ

ルーマニア・ナショナルチームとの対戦を皮切りに、世界選手権大会での対戦チーム、さらに同大会の上位戦見学など、今回のヨーロッパ遠征で学び、また感じたことは、とてもこの紙上に書きつくすことが出来ないほどあるが、自分なりにその概要をまとめてみた。

これまでヨーロッパのチームに接して帰った人たちのいうことが、一体どういうことを意味しているのかという疑問が、今回の遠征によって具体的に解釈できるようになつたと思う。

まず、もつともわれわれ日本人と異なる点といえば、やはり彼らの体力・体力の優位さから生ずるボーラー・コントロールであろう。彼らはほとんどボールを完全に片手で握つてプレーする。そのため、どこからでも、どういう姿勢からでもパスができる日本人と同等の体格の選手でも

みんなボールをらくらくと握つてプレーする。

このようにボールに対する身体的な条件が日本人よりもはるかに有利であるという点は日本人にとっては、すぐには解決できないことであると思うが、この相違が、他のプレーにも大きく影響を及ぼしていると思う。

前述したようにボールを完全に片手に握つてプレーできるので、いわゆるショート・フェイントの威力が大きく、したがつてディフェンスを非常によくひきつけることが可能となる。そして各種のフォーメーション・プレーが生じてくるわけである。

例えればサイドでのブロック。こ

れも日本のようにブロックしてか

らのショートというのではなく、シ

ョートに入るのとほとんど同じタ

イミングでブロックに入るという

よう、そのタイミングが非常に

うまい。ディフェンスは一瞬、目の

日本人と同等の体格の選手でも大きな選手の打点の高いジャン

プショート、すばやいモーションのステップショート、わずかな間をぬうアンダーショートなど。

またルーズボールに対する強さ、ドリブルの巧みさ、ポストショートの強引さとそのボディコン

トロールのよさや、ディフェンスの間をカットインする時の敏捷な動きなども日本人よりも優つてい

たようである。

彼らが、日本に對してしばしばアンダーショートを成功させていたということは、日本のディフェンスの甘さ、ボールに対する手數（てかず）の少なさを意味していると思う。

彼らのディフェンスは、非常に強引なポストプレーと、確実なポストショート。パスモード

ーションを非常にはやくできるの

で、わずかなスキでもポストへパスを通す。攻撃の時、ブロックを

利用してのロングショートやパス

トという型が多かつたようと思

う。

個々のプレーについていえば、

ロングショートのスピードと正確

さである。

しかし、今回の遠征において、

世界選手権3試合をふくめ日本の

長身者のロングショートが効果的

で敏捷であったということであ

る。

このようにいろいろな技術を

学ぶこともさることながらナンショナルチーム同士の対戦に際する両

チームのほとばしる気迫といわゆる根性、これこそ何をおいても学

ぶる必要のある最大のものであ

ったと思う。（完）

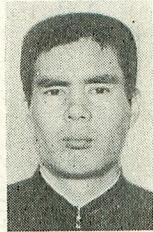
次回はフランスで

第7回世界男子7人制選手権大

会は一九七〇年（昭45）フランスで行われる予定。

見習いたい気力の充実

～近藤信行～



これまで、私個人としては、国際試合はフランス（ステラ）と中國ナショナルの二試合しか経験がなく、本場のプレーに関しては話を聞いて想像しているだけであつた。それが今回の遠征でその真面目を強烈に身体で味わい、見ること

が出来たのは何としても貴重なことであった。

彼らのプレーは一見ぎこちなくて、スロー・モードを感じをうけるが、実際に体験してみるとスピードがあり、その速さにとまどはばかりであった。話を聞いただけでは実際の“速さ”は絶対に判らない。そして、そのスピードプレーになれればなるほど、いかにその速さがすばらしいものか判つて来る。

止まつてプレーするプレイヤーがいないこと、全員がたえず次の展開にむかって動作していること、ボールを片手で完全に握つていることなどが特に強烈な印象をうけたことだが、ボールの片手キヤツチによって、フェイントプレーが自在となり、トリックキーナパスや、ボール一つ分のスキか小さな動きと大きく流れるよう

にクロスして、バックスとバックスの間から放つロングショート、切りこみの鋭さ、それにドリブルプレー、それらがいくつにも組み合はされてたえずディフェンスのスキを狙つてくる彼らの攻撃の動きは、文字通り“多彩”であり、しかもその動きにムダがないのも感心させられた。

戦法的には一言でいえばボスト



(転倒した選手の上からシュート！／西独一ソ連戦)

プレーが非常に多く、しかも巧妙であった。瞬間にプロックしてポストを使うポストプレーと、するどく切りこんで来てポストに入

るポストプレーの二つが常とう手段のようにみうけられたが、ボストマンにボールが通つたらまず失点を覚悟しなければならないし、たとえマークでつぶしても7MTをとられた。

シートはほとんどが倒れこみであつたのは予想通りだが、シートの得点につながるボールへの執着力はまことにみごとで、どんなムリな体勢でもキヤツチシュートしようとする気がまことに満ちていた。

かわったディフェンスを布いていたのはソビエトで、全試合を通じて、相手のポイントゲッターを徹底的にマン・トゥ・マンでとらえていた。この方法も有効的で研究された。

かわったディフェンスは、詰めの早さと日本との相違はサイドディフェンスである。サイドディフェンスのプレイヤーは、反対側にボールがあつても自分の前に居るオフェンスにマン・トゥ・マンのよう

からそのようなことができるのだ。

西ドイツ-ソビエト戦では、西ドイツが初めから終りまでマン・

ハンドボールの本場であるヨーロッパのプレーを実際に目で見、体で接することによって、間接的、直接的に参考になりました。まず、デイフエンスはほとんど6人一線防禦。これは40×20mという小さなコートで長身、厚い胸、強い腕力、長いリーチの者が大きく両手をひろげ、ボールを持った者に対し必らず詰めることにより、1・5デイフエンスの左右45度に対する弱さを補い、同時にロング、ミドルショートに対処し、2・4デイフエンスのセンター、ポストの空間をより少なくして、効果的なデイフエン・シフトを布いています。

彼らの、たかが一步の詰めとはいえ、大きなストライドを利用してのそれは、ゴルエリアに沿っていても、充分フレースロー・エリアあたりまでは詰めることができます。

日本は、身長、胸巾、リーチ、ストライドの違いで、6人一線防禦はまだ無理ではないでしょうか。

もう一つの特徴に、ポイントゲーターに対するマン・トゥ・マンデイフエンスをよく見かけたこと

手自身のポイントを減らし、ボイントゲッターを中心にして廻さるは、コンビネーションプレーをくずすのに大いに役立っていたようと思われます。



正しい日本の練習法

技術リポート

飯端寿昭

です。これは、彼（マークする相手）自身のポイントを減らし、ボイントゲッターを中心にして廻さるは、コンビネーションプレーをくずすのに大いに役立っていたようと思われます。

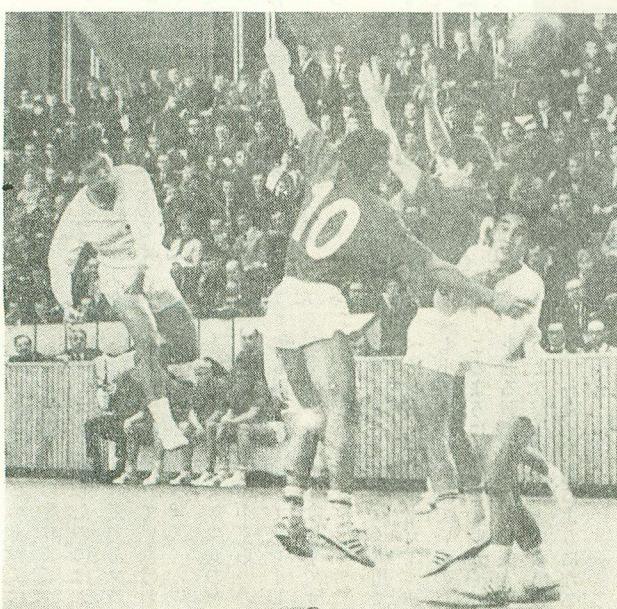
さて、オフエンスですが、ボールをあたかもソフトボールのごとく完全に握り、手首でプレーをすることから出発しています。バス、フェイント、ショートな

ものは北欧特有の長身で、柔軟な身体を利用してのトリックプレー、あるいは何処から通るのだろうかと、のパスなどを主体にした戦法です。しかもそのスピードはどちらのタイプにしろ「すごい」の一語につき、ショート力のすばらしさも目を見はらされます。

しかし、日本のロング、ミドルショートあるいはポスト、サイドからのショートはスピードこそ彼らの全試合を通じ、点はどれがとられるというようになんら大きな得点で勝負が決まっています。したのは、ここに原因しています。

日本の全試合を通じ、点はどれがとられるというようになんら大きな得点で勝負が決めねばならないのは非常に苦しく、ディフエンスの重要さを再認識させられました。

最後に、われわれが日本で毎日々におどりますが、GKとのかけ離れ、「ボールを握る」ということを前提としてヨーロッパのプレーは大きく二つのタイプに分けられると思います。一つはチエコ、ルーマニアなどに代表される東欧諸国の人々が、そのほか、ディフエンスからオフエンスへの転換の過程でわれわれが見ていて、そのまま押せられながらロング、ミドルショートに結びつけるタイプと、もう一つはデンマーク、スウェーデンなどに代表される北欧のタイプです。こ



(日本の攻撃は本場でも一流だ。日本—ノルウェー戦)

全身を使うGK技術



尾形

譲

腕全体、体全体
を使ってボールを
はじき出すように
するのが最善であ
ることを改めて知
ることが出来た。

▽ F P

ズーダ（チエコ）
ブルナー（チエコ）
マレシュ（チエコ）
グライア（ルーマニア）
ティンデマン（東ドイツ）
ソロムコ（ソビエト）

同氏は日本一ハンガリー戦の主
審もつとめた。

フエア杯は西ドイツ

またこの大会の最優秀審判員に
は、地元スウェーデンのベテラン
H・カールソン氏が選出された。

最優秀審判には力氏

この大会でつねにフェアなプレー
を見せ反則退場通算時間の最も
少かった国（チーム）に贈られる
フェアプレイ・カップは西ドイツ
の手に渡された。西ドイツの退場
総計時間はわずか6分（2分・3
人）であった。

ヨーロッパ各地でゲームをして
いくうちに特に強く感じさせられ
たのが、日本チームのディフェンス

の弱さであった。
これは技術的なことよりも、や
はり体力の差とヨーロッパのプレ
に対する不慣れのためだと思
う。

体力の差というのは彼らの腕
力、握力それと足腰の強さ。これ
らの一つ一つが日本チームと大き
な違いになって表われ、たとえば
握力が強いために、ボールを握っ
てプレー出来る。ポストにおいて
も、一度握ったボールは絶対に落
すことなく、ディフェンスのし
かたも後手々々にまわらざるを得
なくなる。

このために日本のバックス（デ
ィフェンス）は大変苦労したわけ
で、ポストは半身（はんみ）にし
ておくとボールを落とされるし、
まだ完全につぶしておくと上から
ロングを射たれるという具合であ
る。

日本の場合は手でボールをおさ
えようとするから、手にあたって

もスピードと重いボールのためゴ
ールを割られてしまう。

▽ G K ホルスト（デンマーク）

相手にとられた点数はほとんど
がポストからのものであった。し
かし、試合の数を踏んでいくうち
に、彼らの攻撃にもなれて来た。
45度にいるディフェンスの詰め
と戻りによるフットワーク、それ
とトップ（1・5の1）があまり
浮かずポストをしめるようにした
ら堅いディフェンスを組むことが
出来た。

G Kとしても、彼らのスピード
にはついていくことが出来なかつ
た。これは、日本式のキヤッチ
(G K)では、彼らのショート
をストップすることがむづかしい
ということで、ヨーロッパのG K
の守りは、ほとんど、体全体を
つかってボールをはじき出してい
る。

ゴール前でバウンドするショート
には弱いことである。このため日
本チームのショートがよく決ま
っていたのだと思う。それに一本調
子のショートに対してはどのよう
に速いボールでもおさえるが、タ
イミングをはずしたショートや、
バックスをかわしたショートには
比較的もらい。

だが、彼らの足首の強いのには
おどろかされた。おそらく彼らは
小さい頃からサッカーに親しんで
いるせいではないだろうか。守り
全般を通じての印象は、ヨーロッ
パを相手にして勝つためには、体
格の大きいものを連れていかなく
ては、たとえ点数をあげ得ても、
失点を少くすることは難しいので
はないかということである。（完）



ヨーロッパの選手たちの攻撃時におけるスピードはすばらしい。多彩な変化で相手のディフェンスをはずしノーマークを生んで得点を狙ってくる。写真は日本の守備陣をかわしてシュートするハンガリー選手。